

# 子どもの活動と保育空間（その一）

堀井仁子

## 赤塚保育園への転勤（スペース保育の動機）

「あれ!! うその園長先生だぞ!!」

「ヘーナンノー」事務室の入口からものめずらしそうに、私を眺めては、口々に感想を述べあっている子ども達。転勤してまだ十日もたっていないこの赤塚保育園で、事務引継ぎに一生懸命で、そして、子ども達の顔も名前も、まだおぼえていない私に、遠慮のない声をあげせかけて来る。

「クチョババー!!」と、言っただけで逃げて行く子ども。

「ドッカカラキタノ?」と、まるでめずらしいものでも見るように

……。

みんな何とかして、自分達との接触のきっかけをつかもうと、

しぎりにデモンストレーションして来る。これでは、事務室に引込んで行くわけに行かず、保育室へ……。

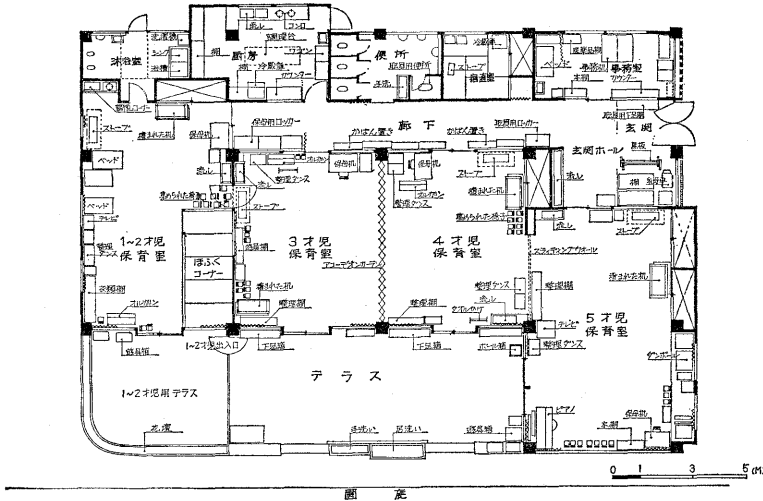
ワァーッと群がって来る子ども達の活気は、それまで勤務していたマンモス団地（高島平団地）内の保育園での子ども達とは、随分異なった新鮮な活気が伝わって来る。

昭和四十九年四月のことだった。それをきっかけに子どもと一緒にあそぶ中で、観察をし、クラス担任をしないフリーな立場の客観的な見方をするよう務めた。

そういう目で見ると、実に生き生きとした子ども達であり、新しいものへの興味は、すぎましい程で、いろいろなものへ目を向けて行くことの出来る子ども達であることを知る。

ところが、良く見ていると、いろいろなものに、すぐに飛びつくが、長続きがせず、物を深めて、考えてゆくことが、まったく

不得手であり、自分の要求・感情をむき出しのままなのでトラブルが多い。例えば、バラ組（四歳児保育室）を通り抜け、廊下を通り、さらに、さくら組（五歳児保育）をかけ抜け、テラスに走



図一 赤塚保育園平面図

って行く子ども達をよく見かける。その通路であそんでいる子ども達をあそびは、妨げられ、そこで中断されてしまう。良い面を、いっぱい持っているが、それが打ち消されてしまう事が多い。何故だろうか？

当時の赤塚保育園（図一・表一）では、他のほとんどの保育園がそうであるようにひとクラス、ワン・ルームで保育が行なわれている。食事も、午睡も、すべての保育活動（戸外あそびを除く）のデیلیー・プログラムはワン・ルームの中で運営されていた。

一斉保育で、ゲームあそびをしたあと、机を出して食事。終ると、机を片寄せて、午睡の準備等。一日に何回も、言わば必要以上に、机が出し入れされる。（近頃の机椅子は、そのために、積重ねられるようになってるが：）

（三）

その都度、子ども達は、場所が作りなおされるまで、片隅で、待たねばならない。

表一 定員および人数構成

	1才児	2才児	3才児	4才児	5才児	Total
乳幼児	8人	8人	16人	18人	18人	68人
保育士	2人	2人	2人	1人	1人	8人
その他	用務員1名、調理士2名、園長1名、保健医1名(非常勤)					

待つことも大切だが、毎日の生活の中で、これ程、待つことの多い生活は、その分、子どもの活動時間が少なくなっていくのではないだろうか。

子ども達の家庭環境も、ひと間のアパート生活者が多く、子どもも安住する「場」の確保は望めない。保護者会で、「うちの子は夜、寝るのが遅くて困る」との発言がしばしば出る。話を聞いてみると、一日の仕事を終えた父親の唯一の楽しみは、テレビを見ながら、一杯やることだと言う。その傍のふとんで寝る子どもは寝れる訳がない。

何とかして、子ども達が、落着いてあそべる場所を作るわけにはゆかないだろうか？

現状の狭い保育室では、いかんともしたがたいが、せめて、絵本を読んだり、テーブル・トイで遊べる場所の捻出は考えられないだろうか？

そんなことを考えつつけている折も折、建築家の卵で「保育空間」について、研究をしている坂本さん（当時、日大の大学院で建築計画を専攻、現在、神谷・荘司計画設計事務所勤務）と知り合った。

## 建築家と知り合う

彼は、……

「保育」とは、一、二が保育者自身で三、四がなく、その次が、設備・備品なのだろうか？

そして「保育空間」とは、保育を進める上で、必ずしも重要なものではないのだろうか？

ほくは、この考え方に疑問を持ち続けています。もちろん、保育は、保育者の適切な誘導がなくては、成立しないという大前提の上でのことです。

良い保育空間で、適した設備・備品の手助けがあつてこそ、より良い保育がなされるのではないかと考えています。

訴えたいことは、空間の質によって、人間の心理が、いかに潜在的に多方面に渡って影響を受けていくかということなのです。

その上、建築的に研究が行きつまっているのが、保育空間を含めた「子どもの空間」の分野ではないかと考えています。それは、保育空間を研究する建築家の少ないこと、それに加えて、現場の保母さんや保育学者の保育空間に対する意識や、要望などが、少ないせいではないでしょうか。

保育空間をもう一度みつめ、少しでも、より良い保育を進めてもらいたい」

という考え方を強く持っている。私も、少なからず、彼の持論に共鳴するところがある。

### 職員会議開かれる

しかし、限られた、現状の保育室を、最大限活用し、保育に生かしてゆくには、どうしたら良いだろうか？ ということで、職員会議に提案し、討議が行なわれた。

職員会議の出席者は、保育者側から、園長（堀井）・主任（平沢）・保母（森・高橋・畠山・高山・信松・杉山・金子）。そして、建築側からは坂本さんであった。

園長「今日は、これまでの保育反省会の中で子ども達が落ちついて考え、行動が出来ないのは何故か？ ということについて、話し合ってみたい」と提案する。

森 「とても活動的な子ども達が多いから良いと思っているわ」

畠山 「そうね、元気はあるし、だけど、絵本など見ているも、すぐにはポイッと放り出して別のあそびに移ることが多いのよ」

ね」

高橋 「結局、子どもって、動きまわることが好きなんじゃないかしら？」

畠山 「でも、活動的なあそびでも、長つづきがしないし、すぐにあきてしまうのはどうして？」

主任 「毎日の生活が、細切れすぎることに、一因はないかしら？  
例えば、積木をしていても、ほかからの邪魔で、せっかく、積み上げた積木をくずされてしまい、何度か繰返すうちに、あきてしまうとか……」

坂本 「ですから、保育室の形態を変えてみてはどうかと思うんですが、これまで壁ぎわに置いてあるロッカーや本棚を保育室の中に移動させ、いくつかの活動空間を作るのです。落着いて絵本をみたり、ブロックをしたりする活動空間を確保して無性格な保育室に性格付けをしてみてもどうですか？」と、実験保育を提唱する。

保母達は、実験保育という試みに対して、非常に強い拒否反応を示す。その表われとして、

高橋 「保育室が大きく変わることは、子ども達が動揺するし、良い方向に向くとばかり限ってないので賛成しかねるわ」

森 「私もそう思う。毎日の生活の中でだって、努力してゆけば良い方向に向けられるもの」

新しい提案に、不安と抵抗を示す保母達の中から主任の発言があった。

主任「やってみなければ、わからないでしょう。そのためには、十分考えて、良い方向に進むように、準備してから始めましょうよ」

高橋「でも、子ども達は、実験台にされるわけでしょう。モルモットではないんだから……失敗は許されないんだから……」

園長「ねえ、いつか茂ちゃん、粘土ペラを取りに行き、自分の机に戻る途中、走って来た友達とぶつかって、ほっぺを突き、二針、縫ったことがあったでしょう。もしも、手近な所に、粘土ペラがあったらあんな事故を起さないで済んだかも知れないわよ」

畠山「そうね、そう言えば、保育室の床の上に、絵本がちらばっていても、平気で、ふんで歩く子どもを見かけるけれど、注意するだけでなく、絵本の置き場所や読む場所を私達が考えなおす必要があるわね」

主任「とにかく、私達もう一度、まわりを見まわして、考えなおすことが必要なんだから、一回だけでも、やってみてはどうかしら」

保母「そうね……」

という事で諸手を上げて、と言わないまでも、保育空間について、考え、話し合いを進めることに徐々にではあるが、保母達の気持は、動きはじめ、その後、何回かミーティングの場が設けられた。

### 制約の多い中で

ところで、赤塚保育園は、公立（東京都板橋区立）のため、予算についても、一園だけ特別なものは、組むことが出来ない。本来ならば建築的見地から、調査、およびアドバイスをしてくれることになった共同研究者の坂本さんが園内に立入ることすら簡単に許されない。私達が、「何故保育空間を考えるようになったのか！ どんなことをしようとしているのか！」を板橋区の保育課長に子どもの流れ図等の資料を持って、説明に行き、理解を求めた上で、許可を得た。

しかもその上、特別な予算はいっさい組めないこと、そのために、子どもがけがをするなど、事故が起きたら即、中止という約束のもとに、実践を許された。

## スペース保育の実践へ

建築家と合同の第一回職員会議で「十分、考え、準備した上で、とりあえず試みてみましょう」ということで、クラス別のスペース保育を行なうことが決定した。しかし、単に子どもたちが、実験台のモルモットに終わらないよう、実践のためのミーティングを重ねた。

ミーティングでは、坂本さんから、子どもの流れ図(図-2)や、スペース保育以前の保育室の使われ方のデータ・シート(一例として三歳児保育室の図をかかげる 図-3)の説明を受けた。そして、「建築家による保育室」という御仕着せを脱するため、坂本さんのいくつかの試案を参考に、担当保母が、それぞれ、間取り図(図-4)を書くことになった。

短い期間ではあったが、一週間後に、それぞれが持ち寄り、坂本さんから、採光や広さなどアドバイスやチェックを受け、ディスプレイをした上で配置を決定した。

その結果設けられた活動空間は、三歳児保育室の場合、図-5に示されているように、午睡のスペースを確保した上で、まず以前から子どもたちが、落ちついて活動していた場所に、ホーム・

スペースを設け、次に、子どもたちが、良くあそぶ、ごっこあそびのためのスペースを配置した。

ホーム・スペースとは、小さな活動空間で、「ここは私の場所よ」と心の安定を与え、いつでも自分の「場」が固定しているように考えられたものである。そして、ほんとうは、椅子などには、個人の座ぶとんなどで、変化をつけたかったが、予算上、いかんともしがたく、やむなくあきらめ現状の椅子をそのまま使用した。

また、ごっこあそびのスペースは、絵本棚や遊具棚で、他の活

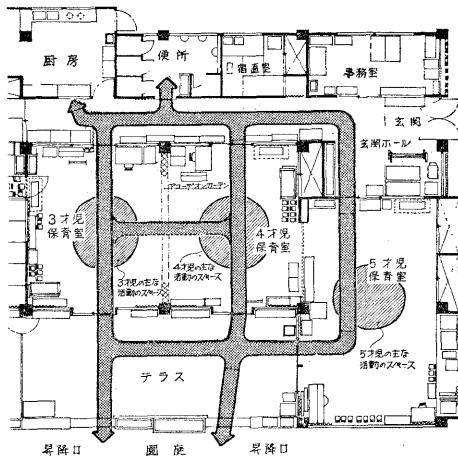


図-2 子どもの流れ図

赤塚保育園での子どもの流れ・動きを示したもので、上図は3~5歳児保育室を中心として考察したもの。一般的な動線図とは異なり、子どもの動く主たる道筋を直線的に図化している。この図によると、活動の場と、移動のための道筋とが不必要に交差している様子がわかる。

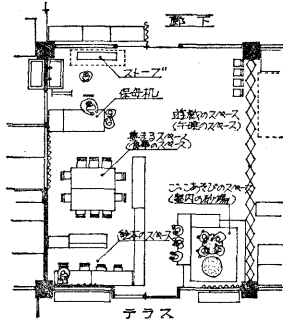


図-5 スペース保育

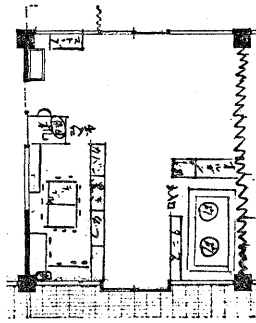


図-4 保育による  
間取図

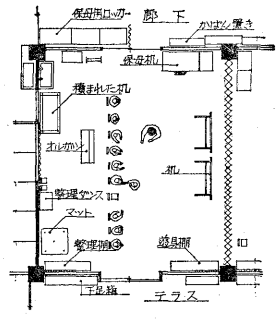


図-3 三歳児保育室

S. 50. 3.12. AM 9 : 40  
朝の自由あそび。保育は保育室全体を見わたせる所に位置し、子どもたちはそれぞれのスペースであそびをはじめようとしている。活動空間はごっこあそびのスペース（午睡のスペース）、砂あそびのスペース、集まるスペース（食事のスペース）、絵本のスペースなど。

縮尺1/100図面に、データ・シート、試案等をもとに、日頃子どもたちが落ちついて活動していた所に保育の希望する活動空間を保育自身の手によりかいたもの。梅雨時であったため、室内での砂あそびの場が試みられている。

S. 49. 6.14. AM. 10 : 10  
朝の体操の後、それぞれの保育室に子ども達が集まり、保育の誘導のもとに、一斉保育がはじまる。オルガンと、わかされた机とが利用された保育（整理されたデータ・シートより）

\* ホーム・ベースは、一九六六年イギリスで発表されたプラウデン・レポート (Children and their Primary School) のモデル校として設計されたイブリン・ロー小学校の内にある活動空間。  
他の文献では、quiet room と呼ばれている。欧米との教育制度等の違いにより、現在では坂本さんによる活動空間の分類では、「集まるスペース」としている。

(板橋区立弥生保育園)

(つづく)

動空間と仕切り、カーペットなどを敷いた。ブロックやママゴトなどを手近に置き、すぐに出してあそべるように、配置した。  
壁を背にして置くように作られた家具が、子どもがもたれたくらいで倒れたりしないよう、家具の大きさや凸凹をできるだけ揃え、足元をガム・テープで固定し、かつ、家具同士がガム・テープで連絡し、安全対策を十二分に施して、翌日を持った。